

教 育 研 究 業 績

2021年5月1日

氏名 今仲 昌宏

学位: 文学修士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
言語学 文学	音声・音韻 語用論 文法 英語史 英語教育一般	
主要担当授業科目		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 腹式発声法による英語発音指導の実践	平成8年4月～平成9年1月	『音声学会会報第210号』に発表した「日本人学習者の腹式発声法指導に関する試行的研究」に基づいて東京成徳大学英語・英米文化学科の学生に対し英語発音指導を行い、強勢等の改善の効果があつた。
2 作成した教科書・教材 1) “East Beyond The Wooden Horse”	昭和63年3月	Barry Natusch氏による、中近東ならびに中国を旅した折の印象をまとめた4編からなる英文エッセイに編注、練習問題を施したReading用教科書である。
2) “Endangered Modern Society”	平成6年4月	Glen Sanders氏による、現代アメリカが抱える問題、環境問題、日米文化比較等を中心とした提言についての9編の英文エッセイに編注、練習問題を施したReading用教科書である。
3) 『国際音声記号(IPA)ワークブック』	平成17年5月	簡易表記(broad transcription)の国際音声記号(IPA)を正しく理解し、発音ならびに基本語彙についての音声記号による表記ができるように編まれたワークブックである。
4) 『英語発音クリニック』	平成21年4月	日本人学習者を対象とした英語発音学習用教科書である。発音を体系的に習得できることを念頭に、母音、子音、強勢、イントネーションというように段階的に小から大へと発音訓練ができるように編纂した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 旺文社 LL 教室講師養成講座 (英語発音教授法)	昭和63年6月16日～平成6年3月10日	旺文社 LL 教室講師養成講座において「英語発音教授法」を担当し、講師に対して講義および指導法を教授した。(全51回)
1) 1989年度(財)日本LL教育センター・LL友の会主催『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』審査員	平成元年12月17日	1989年度『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』の関東地区大会の審査員を勤めた。(大手町KDDホール)
2) 1992年度(財)日本LL教育センター・LL友の会主催『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』審査員	平成4年1月12日	1992年度『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』の関東地区大会の審査員を勤めた。(大手町KDDホール)

3) 1993年度(財)日本LL教育センター・LL友の会主催『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』審査員	平成5年12月17日	1993年度『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』の関東地区大会の審査員を勤めた。(大手町KDDホール)
4) 1994年度(財)日本LL教育センター・LL友の会主催『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』審査員	平成6年1月9日	1994年度『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』の関東地区大会の審査員を勤めた。(大手町KDDホール)
5) 1994年度(財)日本LL教育センター・LL友の会主催『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』審査員	平成6年2月9日	1994年度『全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト』の全国大会の審査員を勤めた。(芝公園abc会館)
1) 『英語講師のためのワークショップ・セミナー』講師(大阪会場)	平成3年9月8日	(財)日本LL教育センター主催の英語講師に対する講習会で「英語音声学と発音」について講義・指導を行った。(大阪・東興ホテル)
2) 『英語講師のためのワークショップ・セミナー』講師(東京会場)	平成3年11月10日	同上。(東京・リッチモンドホテル)

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1. 資格、免許 1) 中学校教諭一級普通免許状 外国語(英語)	昭和54年3月	昭54中一普第227号(東京都教育委員会)
2) 高等学校教諭二級普通免許状 外国語(英語)	昭和54年3月	昭54高二普第227号(東京都教育委員会)
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての 特記事項		
4. その他		

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別 共著	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 『日本文化探訪—日本のアイデンティティーとは何であるのか』		平成4年10月	八千代出版(財団法人私学研修福祉会刊行助成) P223~P264	日本語における音声言語と文字言語とが、どのように関わりあって結びつき、認識されているかを英語を中心とするアルファベット系言語との比較によって論じた。日本語の体系には文字が不可欠であり、欧米型の音声中心の言語理論では到底説明しきれない現象が数多く生じている。アルファベット26文字に対し、漢字、仮名等様々な文字表記を組合せ、頻繁に起こる同音衝突を多面的な方法で処理する特徴は正に日本語特有のものである。また外国語を研究することによって初めて明らかになる日本語の側面について、言語、教育、文化という幅広い立場から、彼我の違いを分析した。 日山紀彦、秋山秀一、樋口信夫、橋川俊樹、と共著
2. 『オーストラリア・ニュ	共著	平成23年12月	オセアニア出版 P208~P221	英米語には見られないオーストラリ

ーギーランド英語文化大辞典』				ア・ニュージーランド特有の語彙や英語表現を中心に編集した英和辞典である。通常の英和辞典とは異なる点として、上記の地域の文化用語についても見出し語を多くし、且つ詳述した解説・写真・図等を多く加えたものである。 今仲昌宏、他50名と共著
3. 『シルフェ<本の虫>が語る楽しい英語の世界』		平成30年12月	金星堂 P182～P197	今仲昌宏、他24名と共著 第3章「ことばと近代化ー日本語の近代化と英語」 明治期に日本が実施した日本語の「近代化」について、社会言語学的観点から論じた。西洋語彙の翻訳借入に始まり、いわゆる言語計画あるいは言語洗練を実施することによって日本語を近代国家にふさわしい言語に導いた方策等について考察した。
(学術論文) 1. ‘A Contrastive Study of English and Japanese Enunciation’ (修士論文)	単著	昭和56年3月	明治学院大学大学院文学研究科英文学専攻	日英語それぞれの発音の特徴を形成するにはいろいろな要因・理由が考えられるが、特に呼気圧の差に焦点をあてる。英語子音(閉鎖音、破擦音等)は日本語と比較し、調音上ノイズレベルが高く、それは主として呼気の強さに原因がある。これは英語が日本語の高低アクセントとは基本的に異なる強勢アクセントをその体系としている点とも一致する。さらに英語発音指導上、重要なポイントと考えられる。
2. 声帯の諸機能に関する音声学的考察	単著	昭和56年3月	ねびゆらす第9号 P125～P134 (育英印刷)	言語音の氣息化、硬音/軟音の区別、声門摩擦音/声門閉鎖音の違い、語頭・語末における有声子音の無声化について、声帯の振動様式と形態を言語学および生理学的側面から記述、説明したものである。
3. 英語教育における呼吸法の重要性とその活用	単著	昭和57年2月	シルフェ第21号 P71～P81 (金星堂)	英語音声指導は、これまでもつばら個々音の調音の記述を中心に論じられてきたが、日英語の呼気圧の強さの違いが調音上必要であるという観点から、2つの呼吸法(胸式呼吸、腹式呼吸)を取り上げ、その諸特徴ならびに両言語の発話にどのような影響を与えているかを考察した。特に英語発音習得には、腹式呼吸が有効であることを論じた。
4. 呼吸法にみる英語音声指導	単著	昭和59年2月	シルフェ第23号 P50～P64 (金星堂)	英語らしい発音を習得する際に、腹式呼吸が呼気の安定、声帯振動の持続、声道での共鳴、強勢アクセントの習得、語頭閉鎖音の氣息音化として有効と考えられる。これを実際の発音練習(姿勢、発声、共鳴、Breath-groupの延長、強勢の強化、英文音読等)で具体的にどのような形で生かせ

				るかを試案として示した。
5. 英語母音音声指導の問題点	単著	昭和60年2月	シルフェ第24号 P52~P64 (金星堂)	日英語の母音数の比較において、英語は約5倍日本語より多い。さらに声道の狭めから調音を行なう子音と比べ、母音発音習得は筋運動感覚に頼らざるをえない点が指導を困難にしている。これまでは母音図表(Vowel Chart)を用いて、口腔内の舌面位置を示すことで各母音の音声の違いを記述してきたが、X線を用いた実験データでは英語母語話者の舌面は図表とはかなり異なることが明らかになった。母音音声指導上の図表使用の功罪を論じ、新たな指導方法を提示している。
6. 言語習得における音声器官	単著	昭和61年3月	東京成徳短期大学紀要 第19号 P69~P79 (東京書籍)	言語発音を論ずる際、通常話者の調音器官の違いを無視することが前提であるが、実際にはいかなる相違があり、それが調音にどう影響があるかを生理学的な面から各調音器官別にその可能性を考察した。さらに言語習得の過程、言語の種類、器官の発達などとの相互関係から、この相違がもたらされ、民族的特徴となったという遺伝学者 Darlington の仮説について一般音声学の立場から論じた。
7. 教育工学とLL教材	単著	昭和62年3月	東京成徳短期大学紀要 第20号 P1~P12 (東京書籍)	音声および映像LL教材は、教育工学的見地から作成されていなければ、真に効果があるとはいえない。音声指導上効果を上げるには、素材の配列、回数、ポーズ等、様々な点からの綿密なプログラミングが必要となる。ある程度完成されたともいえる音声教材、さらに発展が望まれる映像教材について、その指導上の良否を項目別に考察し、それぞれの効果的と考えられる提示・指導の仕方を示した。
8. Connected Speech における音収縮に関する一考察	単著	平成元年3月	東京成徳短期大学紀要 第22号 P17~P26 (東京書籍)	Normal Speed で生じる英語の音収縮は、(1)一応定説とされている発音器官の物理的制約、発音の経済、最小努力の原則と、(2)話者の心理的な要因からくるものと、2つの仮説がある。さらに高次のレベルの、脳から調音器官へ送られる神経インパルスが通る神経経路の長さの違いに原因があるという考えも提示した。調音過程の複雑さは抽象的な原則では到底説明不可能であり、音響学及び、生理学、言語学の両面から解明がなされなければならない、あらゆる言語に共通する点であることも論じた。

9. 同化の分類	単著	平成2年3月	東京成徳短期大学紀要 第23号 P25～P31 (東京書籍)	隣り合う分節が互いに影響を与えて、変化する現象が同化であるが、共時的な側面が疎かにされてきた傾向がある。同化を体系的に整理する必要があり、調音の要件(調音点、調音様式、声音)と同化のタイプ(完全・不完全、進行・逆行・相互、史的・偶発)の2つの観点から分類・分析方法の試案を示した。全体としていかなる形で同化が生じるかを知る上での1つの指標になると思われる。
10. Accentual Systems and Subglottal Pressure	単著	平成3年3月	東京成徳短期大学紀要 第24号 P27～P42 (東京書籍)	日英語のアクセント体系の違いは現象面からみると、呼気圧の違いに集約できよう。呼気の強さの相違は音韻体系が言語発音に要求するもので、一種の言語習慣と言い換えられる。日英語話者による両言語発音の実験音声学によるデータ分析から、日本語は高低アクセントの故に一定にした呼気を、英語は強勢アクセントのために、フレキシブルな呼気圧の変化を必要とする。両者の基本的相違は発声法、発音の仕方にも大きく関わる問題である。
11. 日本人学習者による英語発音 /I/, /U/ の無声化とその指導	単著	平成4年3月	東京成徳短期大学紀要 第25号 P19～P26 (東京書籍)	東日本の諸方言の話者の日本語発音 /i/, /u/ は、ある条件下で規則的に無声化する。この発音習慣が同話者の英語発音 /I/, /U/ に非常に大きな影響を与えて、無声化が生じる強い傾向がある。英語母語話者には、この無声化が理解の上でどの程度妨げとなっているか、その原因、問題点を指摘し、どのような種類の英語音節に無声化が起こりうるかを分析した。さらにその矯正指導をどう行なうべきか、試案を示した。
12. 機能負担量と英語発音指導	単著	平成5年3月	東京成徳短期大学紀要 第26号 P169～P181 (英和出版)	量的機能音韻論で音韻対立をなす一対の音素がいかなる使用頻度で用いられるか、その統計的結果をその音素の機能負担量という。英語の機能負担量を示したデータを基に、日本語音韻とを比較検討し、日英語で共通する範囲は除いたうえで、日本人英語学習者の苦手とする英語音素を中心とした、学習用音韻対立の設定を試案として提案した。さらに一般の英語学習者が必要にして十分な最小対立を効率的に練習できるような音素リストについても論じた。

13. 英語音声変化と調音限界	単著	平成6年3月	東京成徳大学研究紀要 第1号 P43～P53 (三友社)	英語の日常的使用において生じる音声変化は、調音器官を通じて生成される言語音が、器官の物理的特性や機能上の限界からくる必然的制約により、影響を受けたものである。これを調音限界と呼び、共時的な同化・異化・脱落・添加・音収縮などの広範囲にわたる現象に見ることができる。本論では音節レベルに生じる音声変化の例を中心に、調音器官の限界がどのように英語発音に反映されるかを論じ、検証した。
14. 英語発音・発声訓練前後の英語音素の聞き取りの比較について	単著	平成7年3月	東京成徳大学研究紀要 第2号 P31～P44 (三友社)	前田洋文、堤昌生、今仲昌宏、江澤恭子共著 21名の被験者に対し、英語発音と腹式発声法を一定期間指導を行い、その指導の前後の発音を比較検討した。さらにこの結果が英語のリスニング能力の一部として音素の聞き取りにどのような影響を及ぼすかについて、追研究を行なった。結論としては発音・発声訓練および音素の識別テストをしたケースの方が聞き取り能力の一部を向上させる傾向が明確になった。
15. 日本人英語学習者の腹式発声法指導に関する試行的研究	共著	平成7年12月	日本音声学会会報 第210号 P35～P41	前田洋文、今仲昌宏共著 日本人英語学習者は胸式呼吸を用いて英語発音を行なう傾向があり、腹式発声法を習得することにより、いかに英語発音に効果があるかを実験的に調査した。一定期間、実験群と統制群にそれぞれ英語発音と発声法、英語発音を指導し、指導前と後に音声分析装置に発音を記録して比較した。結果は言語適性を考慮に入れた上で、発音の良否には直接的な有意性は見られないものの発声法指導は短期間に比較的效果が現われやすい傾向があった。
16. 日本人英語学習者による日本語音素/N/の英語音素/n/への転移について	単著	平成8年3月	東京成徳大学研究紀要 第3号 P97～P108 (三友社)	外国語学習では母語の言語習慣が、新しい言語の学習に対し妨害となることがあり、大変重要な問題の1つである。本稿では日本人英語学習者による英語発音において数多く見られる負の転移のなかで、特に日本語音素/N/が英語音素/n/の調音に大きな影響を持つ点について調査・論考した。米人と日本人学習者(英語専攻、非英語専攻)にテスト語句を発音させ、音声分析装置による比較を行なった結果は日本語の習慣が調音条件がほぼ同じ英語発音では明確に反映される傾向があり、わずかに英語専攻に転移が少ないことが検証できた。

17. 英語教育と文化相対主義	単著	平成9年3月	東京成徳大学研究紀要 第4号 P39～P49 (三友社)	英語教育は道具としての機能を指導すると言う意味からは、一見イデオロギー等を全く含まないように見えるが、実は言語に内包される社会規範を無意識に学習者が取り込んでしまっていることに注意があまり払われていない。これらが日本語文化とは異なる価値観を植え付けることにつながっている。英語学習に伴う英語文化の正負の影響を論じ、問題点を指摘し、文化相対主義の立場から考察した。
18. 異文化としての英語学習と母語環境	単著	平成10年3月	東京成徳大学研究紀要 第5号 P29～P40 (三友社)	日本語を母語として習得する過程で内化する日本的特質が、英語の文化的側面とぶつかりあってどのような形で英語習得や使用を困難にさせているか、さらに将来的には母語の習得と英語学習とを連動させることにより、広い意味での言語学習として考え直すとすれば、どのような教育方針が望まれるかについて(1)文化・社会の相違、(2)一部の言語機能上の相違、(3)教育制度・課程に関わる問題に注目し、論じた。
19. 日本人学習者の英語イントネーションの類型	共著	平成11年3月	東京成徳大学研究紀要 第6号 P45～P61 (三友社)	近年音声指導上重視されつつある超文節音素のうち、指導が容易な強勢ではなく、文中のピッチの変化を伴う音調の指導は積極的に行われてきてはいない傾向がある。本研究では中高で習得した音調について、本学の1年生の被験者40名に対し、音声分析を行った。結果は音声表現は筆記試験による学力や動機付けとある程度相関し、語学的適性と関連があることが検証できた。ただし全体的には音調の指導は不十分であることも浮き彫りになった。
20. 日本人英語学習者の英語発音モデル	単著	平成12年3月	東京成徳大学研究紀要 第7号 P39～P46 (三友社)	日本人学習者の英語発音モデルについて検討を行った。近年いわゆる国際英語の立場から、母語話者なみの発音は必要ないという議論があり、本研究では日本以外のアジア・アフリカ諸国の英語モデルと比較検討した。発音に関しては学習者本人の動機付けによってレベルが決定されることが望ましいが、日本人学習者にとっての望ましいと考えられるモデルを2つほど提案した。英語の専門家レベルと一般レベルである。

21. 英語発音指導上の優先事項に関する一考察	単著	平成 12 年 3 月	学術論文集『英語音声学』第 3 号 (英語音声学会編) P451～P464	日本の一般の英語学習者が目指すべき発音モデルについて、日英語の音韻体系の比較から、特に機能負担量やこれまでの様々な研究をもとに習得に際して効率的に習得すべき各発音の優先順位について考察を行い、提案している。英語に現れる発音の頻度順に音素を配列し、日本人に苦手とされる発音と比較することにより、必ずしも習得する必要のないものなどがあり、今後の発音指導のガイドラインを目指したものである。
22. 英語学習と行動規範についての一考察	単著	平成 13 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 8 号 P55～P62 (三友社)	日本人学習者が英語習得上直面する問題の中に日米などのコミュニケーション型の相違があり、広い意味では行動規範が異なる点がある。本研究では純粋に語学的、技術的な困難点ではなく、欧米人と比べ、寡黙で自己主張を避けるなど日本人特有の行動様式が英語を使用する際にどのような問題を引き起こすか、を考察するとともにこうした問題を抱える学習者がどのような英語学習を目指すべきかを検討した。
23. 連結発話の原理と指導	単著	平成 14 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 9 号 P35～P42 (三友社)	英語の連結発話に生じるメカニズムを考察し、その成果をどのように音声指導に生かしてゆくかを論じた。連結発話では同化、脱落等の現象が頻繁に起きるため、辞書項目的発音とは落差の大きい音声に変化する。しかも内容語と機能語の問題も関わる。日本人英語学習者を対象とする場合、音声指導においては聴取能力の養成が優先されるべきであり、産出能力は第二義的なものと考える必要がある。
24. 英語音声指導における音声表記(1)	単著	平成 15 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 10 号 P51～P59 (三友社)	英語の音声表記は従来 IPA が主流であったが近年カタカナ表記やフォニクスなども注目されている。一方、電子辞書などで実際の音声を聞くことも可能な時代となっている。このような状況の中で、大学生を対象に発音表記に関する調査を行い、結果の分析を行った。
25. 英語音声指導における音声表記(2)	単著	平成 16 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 11 号 P1～P11 (三友社)	前著の調査結果をもとに、IPA、フォニクス、カタカナ表記に関して、日本人学習者の音声指導に適した表記はどうあるべきを含め、各表記の長短について論考した。基本的には IPA とカタカナ表記が学習者の習熟期到達目標として可能かあるという結論となった。

26. 英語名義論における有契性と換喩的表現について	単著	平成 17 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 12 号 P39～P44 (三友社)	英語の命名法の一つ公称的擬態建造物の名称・呼称として通りの名義的イメージを一般的名称・公称とする習慣もある。こうした特徴を持つ命名法の特徴について、主として名義論の立場から、有契性と密接に結びつた換喩的表現との関係を論じた。
27. 英語表現における換喩と婉曲表現について	単著	平成 18 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 13 号 P23～P28 (三友社)	認知原理が立脚する換喩表現のうち、特に英語の婉曲表現で、社会的・審美的側面に関わる婉曲表現および疑問形と換喩との関係を中心に考察した。婉曲表現で換喩の通常の型である、表現の簡潔・明瞭性を高めるのではなく、逆に読者の目的媒体を用いる点が興味深い点である。
28. 概念メタファーによるイディオムの学習	単著	平成 19 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 14 号 P51～P60 (三友社)	外国語習得の課題の一つイディオムの学習がある。イディオムは表現を構成する個々の要素の集積の意味するものとその比喩的意味が大きく異なる。しかし認知意味論の概念メタファーの研究により、この「ずれ」の原因が解明されてきた。表現と実際の意味のずれが概念メタファーにより説明が可能となってきたので、これを英語学習者にすべく考察を行った。
29. 声楽のための英語発音法に関する分析(1)	単著	平成 20 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 15 号 P29～P37 (三友社)	声楽上の発音法として、独・伊・仏語等と比し、英語は必ずしも確立しているとはいえない。国際的に通用する英語の標準モデルは英語語と複数存在するため、他の三言語のように統一することは難しいが、音韻論の観点から最大公約数的に全子母音に関する基本的ガイドラインの提案を行った。
30. 声楽のための英語発音法に関する分析(2)	単著	平成 21 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 16 号 P23～P34 (三友社)	(1)の概説に続き、英語母音の言語的特徴のうち、歌唱時に困難となる調音方法の処理をどのように行なうべきかを各母音について詳述し、具体的な方法を示した。
31. 声楽のための英語発音法に関する分析(3)	単著	平成 22 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 17 号 P1～P15 (三友社)	(2)に続き、英語子音の言語的特徴のうち、歌唱時に困難となる調音方法の処理をどのように行なうべきかを各子音について詳述し、具体的な方法を示した。
32. 英語音韻論における語彙レベルの心理的実在	単著	平成 23 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 第 18 号 P111～P122 (三友社)	英語音声知覚機能において、様々な異音を集約的に音素に結び付ける過程で、脳中で現実の大幅に崩れた音形をもとに原音に結び付ける作業に関しては、心理的実在の概念設定が必要となる。照合・補正・正規化に沿ってこの現象の考察をした。

33. 同時調音における調整構造に関する考察	単著	平成 24 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 19 号 P45～P54 (三友社)	発話中の分節連続の調音では、隣接音同士の性格や調音速度に応じて様々な音声変化が生じる。器官の動きが重複して行なわれるのが同時調音であり、この現象の過程で生じる先行的效果による後続音優位となる点を中心に論じた。
34. 英語/l/の母音化と音声指導上の問題について	単著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 20 号 P95～P107 (三友社)	英語のいわゆる暗い/l/は、様々な調査から母音化の拡大が指摘されてきており、同一音素でありながら、明るい/l/とは調音上大きく変化してきている。この現象を検証するとともに、日本人学習者にとって望ましい/l/の発音指導について様々な角度から検討を行なった。
35. 英語発音習得における成人学習者の抑制要因	単著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 21 号 P1～P12 (三友社)	4 技能のうち、脳内での作業が中心となる他の 3 技能に比して speaking は調音器官を通じた運動学習である点が大きく異なっている。英語発音を習得する過程において、成人の日本人英語学習者にとって、この特異な技能の習得上、主な抑制要因と考えられる、心理的ならびに生物学的な点について論じたものである。
36. RP 再考	単著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 22 号 P117～P128 (三友社)	RP が英語の標準的発音と考えられてきたが、英国の社会状況の変化や GA の台頭など国際社会の影響から大きく変化を遂げてきた。今後も標準モデルとしてどのように生き残ってゆくかを社会言語学的視点から評価するとともに論じたものである。
37. 英語音声指導における中和について	単著	平成 28 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 23 号 P131～P140 (三友社)	英語音声指導において英語の中和現象をどのように捉え、指導に生かすかについて論じたものである。具体例として GA の/t/の弾音化を取り上げ、指導にあたりこの音の習得の妥当性について音声体系全体からその可否を考察した。
38. 音声表記再考	単著	平成 29 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 24 号 P113～P123 (三陽メディア)	かつて英語音声表記について、実際の音声の習得と遊離した形で学習が行なわれた可能性が指摘され、その効果が疑問視されたことがあった。現在は電子辞書など、母語話者の音声を耳で確認しつつ、音声表記が学習可能となり、その有用性を欧州の英語教育と比較しつつ論じた。
39. シンガポールの二言語教育政策における政治的意義	単著	平成 30 年 3 月	東京成徳大学研究紀要第 25 号 P35～P48 (三陽メディア)	シンガポールは国家戦略として英語を公用語とし、表面的には効率的に運営されているように見える。しかし実際には政治的干渉度の高い言語政策について頻繁に方針変更が行われており、その

				特殊性と問題点について考察を行なった。
40. 日本人英語学習者のための音韻に関するLFC (1)	単著	平成30年3月	教職課程年報創刊号 P4～P10	日本人学習者は長い間 NS 発音をモデルとしてきたが、国際語としての英語が普及するにつれて英語教育の方針そのものがELFの立場から提案されるようになってきている。本稿では将来的にどのような発音モデルを目指すべきかの概略について検討した。
41. 日本人学習者のための音韻に関するLFC (2)	単著	平成31年4月	教職課程年報第2号 P2～P15	創刊号の続編。LFCの観点から今後の日本人英語学習者が依って立つべき発音の試行的モデル(個別言語基準)を提案するとともにこれと包含関係にある拡大圏の学習者が目指す一般モデル(NNSが共有可能な一般基準)についても考察した。
42. 明治期における日本語の言語適応再考 (1)	単著	令和2年3月	東京成徳大学研究紀要第27号 P1～P13 (三陽メディア)	社会言語学において1960年代から始まった言語計画という新視点から、明治期以降に実施されてきた言語政策(日本語の近代化)について再考した。考察にあたっては、国際的な視座から日本語の言語適応がどのような意味をもつかという点もその対象としている。
43. 明治期における日本語の言語適応再考 (2)	単著	令和3年3月	東京成徳大学研究紀要第28号 P55～P72 (三陽メディア)	前号に続き、日本語の言語適応に関する記述の前半(明治初期の文献翻訳、漢語による翻訳、翻訳借用からカナ語へ、国語国字論、言文一致運動、対外戦争言語統一)について論じている。
(その他) 1. 'East Beyond the Wooden Horse' (再掲)	共著	昭和63年3月	オセアニア出版 P69～P76	江藤秀一、藤倉和明、今仲昌宏共著 本書はBarry Natusch氏による、中近東ならびに中国を旅した折の印象をまとめた4編(The Last Shop in Troy ; Delivering Two Sheep ; Crossing Three Borders ; Wu)からなる英文エッセイに、3名により編注・練習問題が施されたものである。
2. 'Endangered Modern Society' (再掲)	共著	平成6年4月	オセアニア出版 P51～P63	今仲昌宏、内田恵、広瀬良一、沢田敬也共著 本書はGlen Sanders氏が現代のアメリカが抱える問題、環境問題、日米の文化比較等を中心に現代社会への提言を9編(Environment : What can we do? ; The Safest City in the World! ; Teach about AIDS ; Welfare State ; Why go to

				university? ; China :The Giant Awakens ; Who's Right? ; Bang, Bang, You're dead! ; "NO" to LSD)からなる英文エッセイにまとめたものに対し、4名により編注・練習問題が施されたものである。
3.『西洋文化と日本人の声』	単著	平成12年7月	シルフェ会会報平成12年度第2号 P1	かつて日本人の声は多くが「ハスキー」であったが、明治期以降西洋文化や音楽の影響を受けたためにいわゆるベルカント的に変化してきているという報告がある。これは通常「下町声」対「山の手声」などともいわれるように、演歌などの歌の世界でも「ハスキー」タイプが少なくなっていることにも同様の傾向がみられる。これは邦楽器と西洋楽器の音色の相違とも関連付けて「音声と文化」について論じた。
4.『20世紀クロノペディア —新英単語で読む100年』	共著	平成13年7月	ゆまに書房 P87～P123	本書は20世紀という100年間に英語圏で誕生した「新語」をその誕生年代ごとに分類し、約5000語の意味と背景とを解説し、さらにその語の使われた「出典」を記したオックスフォード大学出版によるJohn Ayto 著 “20 th Century Words” -The Story of the New Words in English over the Last Hundred Years- の邦訳版である。日本語から取り入れた英語も多数収録されている。 今仲昌宏、他30名
5.『国際音声記号(IPA)ワークブック』(再掲)	単著	平成17年5月	フリーモント出版 P1～25	あらゆる語音を網羅的に表記できるように国際標準として国際音声記号(IPA)が定められている。その簡格表記を中心に、英語音声表記学習するための教材である。綴り→音声記号、音声記号→綴りという練習問題が載っており、表記する際の注意点などを盛り込んだ。巻末には使った英語辞典で使われている記号を一覧表示した。
6.『英語発音クリニック』 (再掲)	単著	平成21年4月	雄文社 P1～41	日本人学習者を対象とした英語発音学習用教科書である。発音を体系的に習得できることを念頭に、母音、子音、強勢、イントネーションというように段階的に小から大へと発音訓練ができるように編纂した。
(学会発表) 1. 音声と文字による日英比較	単独発表	平成5年6月	シルフェ会(YMCA アジア青少年センター)	音声言語と文字言語についての日英後の対照研究である。日英ではそれぞれの言語的枠組みでの音声と文字の果たす役割が異なっており、使用する文字種、数などの点で特に日本語の文字への依存度が極めて高いのに対し、英語の音声中心のあり方を検証したものである。これにより、日本人の英語習得を阻害する要因を母語学習の過程からも導き出すことが可能であ

				る。
2. 英語学習と母語環境について	単独発表	平成10年11月	日本英語音声学会(聖学院大学)	日本人の英語学習上の問題点として、学習者を取り巻く文化的環境を考える必要がある。英語使用の際、未発達の発表的能力、自己を目立たせないように振舞うこと、などは日本社会で生きてゆく際に重要となる点である。こうした母語教育上の問題や日本的規範があるために、外国語である英語を使う上での困難点が多く存在するので、言語そのものの学習ばかりでなく、規範などの相違についても配慮することにより、学習効果を高めることが可能であろう。
3. 英語音声指導上の優先事項についての一考察	単独発表	平成11年9月	日本英語音声学会(水戸短期大学)	英語発音習得に際して、まず第一に音素目録の中で機能負担量および発話に生じる頻度順に英語音素を並べること、基本的な音素の重要度の重み付けをする。次にその音素項目中日本語発音で代用可能なものとそうでないものに分け、前者を省いて後者のみを指導項目とする。この順序に従って音声指導の効率化をはかろうというものである。